

Title	アブドゥル・ラヒーム・カーンカーナー作『都市の輝き』 : ムガル帝国期の女の恋模様
Author(s)	長崎, 広子
Citation	印度民俗研究. 16 P. 77-P. 99
Issue Date	2017-03-31
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/60691
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

アブドゥル・ラヒーム・カーンカーナー作『都市の輝き』

—ムガル帝国期の女の恋模様—

長崎 広子

『都市の輝き *nagara śobhā*』は、ムガル帝国の都市に集まるさまざまな女性たちの恋愛模様を、その階層や職業ごとに描きだした 142 編のヒンディー詩集である。著者アブドゥル・ラヒーム・カーンカーナー ‘Abdul Rahīm Khān-e-Khānā (1556-1626、以下ラヒームとよぶ) は、ムガル皇帝アクバル (帝位 1556- 1605) の宰相の一人で帝国の勢力拡大に功績をあげた政治家でありながら、文才に恵まれ、初代皇帝バーブルの回想録『バーブル・ナーマ』をペルシア語に翻訳した人物でもあり、ヒンディーの詩人としても多くの作品を残している¹。

本作品の言語はヒンディーの文語ブラジ・バーシャーで、二行詩ドーハー *dohā* を用い、1 編から 4 編で、バラモン女からチューリー売りの女たちまで 66 人の女性の美や恋愛を、それぞれの仕事になぞらえて描いている。『都市の輝き』の都市とは、ムガル皇帝アクバルによって開かれたミーナー・バーザールと推定されている²。冒頭には祝祷があり、女性を描く二行詩ドーハーがつづき、結語等はないが、142 詩編のまとまった詩集である。ちなみにラヒームはこの作品以外にも二行詩ドーハーやバルヴァイ詩を数多く残し、ドーハー詩では自身の名前 *rahīma* または *rahimana* を読み込むことが多い。だが本作品には、ラヒームの名はどこにも記されていない。しかし、作風がその他のドーハー詩と類似していることと、マーヤーシャンカル・ヤージュニック *Māyāśaṅkar Yājñik* が発見した写本の冒頭に、「太守カーンカーナー著『都市の輝き』」³と記されていたことから、ラヒームの作品と認められている⁴。なお、写本の発見は 1925 年で、発見者の

¹ ラヒームの波乱万丈の生涯については、拙稿「アブドゥル・ラヒーム・カーンカーナー著『バルヴァイ詩集』—ムガル廷臣のクリシュナ讃歌—」を参照されたい。

² *Yājñik 1927: Bhūmikā 19*. ちなみに、*Busch(2014: 196)*は町を歩く男性の美を描く「都市の哀歌 *shahrāshūb*」というペルシア文学のジャンルとの類似性を指摘している。

³ *atha nagara-sobhā navāba khānakhānā kṛta*

⁴ 太守カーンカーナーは称号であり、たとえばラヒームの父親バイラム・カーンも持っていたが、詩人として知られた者はラヒームをおいていないため、本作がラヒームの作品である証拠として示されている (*Bhāṭī 2006:189*)

ヤージュニクは発見場所に関する情報を記していないが⁵、
ヴィディヤーニワース・ミシュラはメーワートで見つけたという
新たな写本を使用し1985年に刊本を出版している⁶。

作品の主題は、様々なジャーティごとの女性の容姿の特徴的な
美しさや、恋人を翻弄する婀娜っぽい仕草や、彼女を恋慕いなが
ら結ばれない男の^{ツラヘ}苦しみである。女性たちは愛神カーマの現身
とたとえられ、それぞれ異なる美的な魅力を有している。『カーマ
ストラ』に代表されるような性愛文学の要素がまったくないと
は言い切れないが、本作品はシュリンガーラ・ラサとよばれる恋
愛詩に位置づけられる。わずか6編しか発見されていないが、ラ
ヒームが二行詩ソールターで著した『ソールター恋愛詩集
Śṛṅgāra-soraṭhā』に、内容や表現方法の点で本編は類似している。
また、詩人デーヴァ(Deva, 1673-1767)が著した『ジャーティ・ヴィ
ラーサ *Jāti-vilāsa*』は、本作品を基にしているといわれている⁷。

鑑賞のポイント

本作品では、韻や掛詞が多く用いられ、作詩法時代を代表する詩
人ラヒームらしく、2行詩でありながら、重層的な韻文の構造にな
っている。以下に弓づくり職人の女のドーハー詩から鑑賞方法
の一例を示す。

जो गात है पिय रस परस, रहै रोस जिय टेक|
jo gāta hai piya rasa parasa, rahai rosa jiya ṭeka.
सूधी करत कमान ज्यों, बिरह अगिन में सेक||
sūdhī karata kamāna jyom, biraha agina mem seka.

まずはリズム構造についてであるが、ṭeka – seka で行末の脚韻を
ふみ、途中のカンマまでの前半句(13モーラ)と後半句(11モー

⁵ 写本には書写年は記されていない(Yājñik 1925: 256)。なお、
Lalit 版ではわずか19詩編しかない。

⁶ Vidyānivās Miśr 1985: 183。Miśr は写本の書写年については記
していない。

⁷ Yājñik 1925:257.

ラ) の合計 24 モーラになる⁸。頭韻や脚韻が多用され、1 行目では piya - parasa、rasa - rahai - rosa、piya - jiya、rasa - parasaがある。2 行目は karata-kamāna で頭韻をふんでいる。図解すると次のようになり、リズム感がよいことが分かる。

jo gāta hai piya rasa parasa, rahai rōsa jiya tēka.
 13+11=24 mora
 sūd^{hī} karata kamāna jyom, biraha agina mē sēka.
 13+11=24 mora

次に、解釈を困難にしている掛詞と異読についてみていく。冒頭の jo gāta が Yājñik 版では jo gāta で、Miśr 版では jogati で、Bhāṭī 版では jogavati とそれぞれ異なっている⁹。1 行目の後半句に jiya 「心」があるので、心と身体を対照させているととり、本翻訳では、Yājñik 版を採用して「彼女の身体」とした。piya rasa parasa は、「恋人のラサの試金石」が第一義になるが、parasa は「試金石」以外に「触れる」という動詞、さらには prasanna 満足している>喜ぶ でも解釈できる。すると、「彼女の身体は、恋人のラサ(愛)に触れると喜ぶ」という第二義が現れる。後半句 rahai rosa jiya teka は、「心には怒りがある」という意味で、恋で喜ぶ身体とそれに苛立つ心が前半句と後半句で対照的に配置されている。

2 行目は、sūd^{hī} karata kamāna...agina me seka 「弓を火であぶって矯める」という弓づくりの工程の描写であり、修辭的に用いられている。あぶる火を biraha-agina 「別離の恋の火」と述べ、弓のように別離の恋の火であぶられるのは弓職人の女を慕う男と解釈すれば、「矯める」は「男を彼女の意のままにする」という意味でとれる¹⁰。さらに、sūd^{hī} には sīdhā から音韻変化した「真っ直ぐ」という意味以外に、śuddha からの「純粋な」という意味も掛

⁸ 冒頭の jo は韻律上軽く扱われるため 1 モーラである。

⁹ jo gāta は、「その身体は」の意味で、jogati/jogavati は「専念する」の意味になるが、Bhāṭī は「喜ぶ」と解釈している。

¹⁰ Bhāṭī は、別離の恋の火であぶられるのは弓職人の女とし、「心には怒りがありながら、恋人に触れられて、彼女の心が素直になる」と訳しているが、sūd^{hī} karata が他動詞であり、「素直になる」という解釈は困難であると思われる。

詞になっていると考えられる。第二義は、「彼女の身体が恋人の試金石である」という1行目を受けて、「純度を測る *sūdhī karata*」、つまり「恋人の男の愛の純度を測る」となろう。ひとつの単語やフレーズでの異読を整理し、同じものを下線や四角で示すと次のようになる。

彼女の心： 怒り ⇔ 素直になる
 彼女の身体： 恋人のラサ（愛）の試金石 → 純度を測る
恋人のラサ（愛）に触れると喜ぶ
弓を火であぶって、矯める
恋人を別離の恋の火であぶって、
意のままにする

なお、ラサという単語がこの詩集では頻繁に用いられている。もともとジュースや甘露といった液体を指すが、味わい、愛までも包括する含蓄のある単語であり、あえて「ラサ」と音写のままに残した。

以上のように、重層的に解釈可能な2行詩であるが、ここで示した以外の意味が隠されている可能性は大いにある。なお本稿の後半部の翻訳では、2行詩の翻訳として一定の長さを保つように心掛けたため、「心に怒りを持ちつづけていても、彼女の身体は恋人の愛に触れると喜ぶ（裏の意味：恋人の愛の試金石である）。弓を矯めるように、[恋人を]別離の恋の火であぶる（裏の意味：恋人を意のままにする）。」という日本語訳にならざるをえなかった。

『都市の輝き』は、ムガル帝国期のバーザールに集まる女性たちの容姿や恋の実態が伺える興味深い内容のものであり、文学作品としても極めて優れている。だがこれまで、*Bhāṭī* による簡単な現代ヒンディー語訳があるのみで、インド国外で翻訳されたことはなく、日本語の翻訳もない。ここに全訳紹介する。ブラジ・バーシャー美文学の翻訳はきわめて難しく、多重的な意味の訳出は今後の課題とさせていただきます。

都市の輝き

1. 原初の姿（＝創造主）の輝きは、あらゆる魂におさまっている。知恵が足りないために、私の心と舌ではその賞賛を語ることはできない。
2. 世界の輝きを見ると、目は少し満足する。あちこちに原初の姿の輝きがある。

バラモンの女（brāhmaṇī）

3. バラモン女は高貴で、見ると心が魅了される。その足に触れると、重い罪が一瞬にして消える。
4. 彼女は、プラジャーパティ（ブラフマー神）の神妃[サラスヴァティー女神]であり、ガンジス河の現身のようである。その身体に湧き上がる[美の]波で、目が洗われる。

クシャトリヤの女（khatarāṇī）

5. クシャトリヤの女は、美と愛の遊戯と権威を誇る。まるでブラフマー神が黄金と花を混ぜて苦心して創造したかのような女である。
6. 彼女は人形のような四肢を持ち、賢者の石のようである。彼女と楽しむ者は、[賢者の石によって]どうして金にならないものか（＝最高の喜びを得る）。

宝石商の女（jauharina）

7. 宝石商の女は、時には笑いながら赤いルビー[の情熱]を見せ、時には切れた首飾りの真珠[の涙]を目からこぼす。
8. たとえ彼女が視界から消えても、跡を残さず別れの傷を負わせる。愛しい人の胸を痛めるばかりか、ダイヤモンドのように食い込んでいく。

書記の女（kāyasthinī）

9. 書記の女は、恋の話を口に出さない。その[豊満な]胸元は性愛の合図が書かれた手紙のようである。
10. まつ毛をペンにして、アイシャドウのインキをつけて、目で愛の文字をしたため、読むように恋人に渡す。

絵師の女 (citerina)

11. 狡猾な絵師の女は、セキレイのようなその美しい目で心を奪う。顔を半分ちらつかせて、[心を]真っ二つにしてしまう。
12. [恋人の]顔から一瞬たりとも目をそらさず、瞬きもしない。紙に書かれた絵のように、けっして[恋人の]心から消えることはない。

パーン¹¹売りの女 (tamolinī)

13. パーン売りの女の目はパーンを食べさせたような赤い色をしている。朝から晩までパーンの葉を裏返すように、別離の恋に苦しむ男の心を[痛めないように気をつける]。
14. 身体は、白檀の印をつけ、瑞々しくとても黄色い。唇の[パーンで染まった]赤身がそれに触れると、黄色く変わる。

金細工師の女 (sunārī)

15. 金細工師の女は最上の姿と金色で飾られている。まるで創造主が金細工師の女を型で鑄造して作り上げたかのようなものである。
16. 遊興や会話で心を奪い、抱擁で身体を奪う。他人の心は盗んでも、自身の心は与えない。

商人の女 (baniāina)

17. 商人の女は着飾ってあらわれ、美の店を開く。行商人の方を愛しげに見て、[天秤からそっと]重い分銅をおろす(=値をまけてやる)。
18. 自惚れた彼女は、その目を天秤として使い、眉をまげて微笑む。別離の秤量をごまかし、[恋人の]心の不安[という分銅]を減らす。

染物屋の女 (raṅgarejina)

19. 染物屋の女といると、色欲がわきおこる。その顔には情事の

¹¹ キンマの葉にライム等の薬味を加えて噛む嗜好品。噛んだあとは、唾で口や唇が赤くなる(第51詩編でも同様の描写がある)。

あとの色がある。

20. 私の心をねじって'sとして、鹿の目¹²で射貫く。自らのきれいな色の唇で、好色な者を溺れさせて引き上げる。

水汲み女 (panihāina)

21. 色白の村の女は発情した象のように歩む。彼女に触れると、風のように感じられる。
22. 彼女が水を満たした壺を頭に置くと、それを見て別離の恋に苦しむ男は恥じらう。彼女が喉でさえずると、縄で縛られるように[心は]縛りつけられる。

野菜売りの女 (kuñjaṛī)

23. 色黒の野菜売りの女はディルの葉を売る。いつも恥ずかしげもなく悪態をつきながら、ホーリー祭を遊ぶ。
24. 野菜であふれた彼女の籠を見て近づく者は、偽りの悪態を聞いて、本当に魅了される。

運搬屋の女 (banajārina)

25. 運搬屋の女は足に飾りをつけて、揺れながら歩く。その足飾りの音によって、別離の恋に苦しむ男の心は奪われる。
26. [彼女に関して]ほかの商売取引の価値を誰が考えようか？彼女の愛嬌を見ると、目は満足する。

陶工の女 (kumhārī)

27. 陶工の女は土にまみれ、幼いながらも魅力的で、すばらしい。逆さにした二つの鉢は、まるで彼女の乳房のように見える。
28. [彼女を]見ると、魂が身体に張りついたようになり、どうして言葉を口に出せようか。心はうきうきしても、思いはロクロのように回りつづける。

¹² *kuraṅga* (鹿)。鹿の目は、魅力的であることの比喻としてインド文学では伝統的に用いられる。なお、この単語は、染色屋にかけて、後半の *su-raṅga* (きれいな色) という単語と対になるように *ku-raṅga* (悪い色) となっている。

鍛冶屋の女 (luhārī)

29. 別離の苦しみの火は、昼も夜も燃えつづけ、思いの火花が飛び散る。鍛冶屋の女は、別離に苦しむ男の心を燃やして金打ちをする。
30. 私の心を鉄のように置いて、彼女は愛の槌を振り下ろして叩く。別離の苦しみの火で焼き、目の涙という水に浸す。

酒屋の女 (kalavārī)

31. 酒屋の女は、愛の酒を目にためる。若さという酒に酔い痴れて歩きまわっても、[自分の]胸を触らせない。
32. 目という盃をひっくり返し、唇という肴を与えると、酔っ払いの理性を奪い、欲しいものをつかむ。

牧畜業の女 (gūjarī)

33. 頭の上にヨーグルトを抱えた牧畜業の女は最高に美しい。ヨーグルト（牛のラサ）を口実歩き回るが、その[愛の]ラサをけっして与えない。
34. 客に笑いながら話をして、約束を取りつける。最初に自分の値段を言ってから、ヨーグルトの値段を言う。

野菜農家の女 (kāchinī)

35. 野菜売りの女は何も知らない。愛と思いは目の奥に秘められている。愛の畑に若さという水を毎日撒きつづける。
36. 浅黒く、ニンジンのような唇、大根のような腕が似合っている。座って瓢を売り、横になってキュウリを食べる。

肉屋の女 (kasāin)

37. 自惚れ喜びながら、若さを手に持ち殺戮のために歩き回る。朝から晩まで、別離の恋に苦しむ男の血に飢えている。
38. 目という刀を飾りたて、瞼で合図を送ると、眉毛という三日月刀を研ぎ、振るう。

行商の女 (tabākhinī)

39. 行商の女は、心[という籠]が満ちていても、手で触れさせない。少しの肉汁を味わわせ、すべて[の客]を骨抜きにする。

40. 唇は美しく、目は潤い、全身は満ち溢れている¹³。彼女の乗せたものを食べても、別離の恋に苦しむ男は、満足しない。

油売りの女 (telina)

41. 油売りの女は、ジャスミンとゴマを混ぜた芳香を[その身に]漂わせている。別離の恋に苦しむ男の視線が、搾油の役牛¹⁴のように、[彼女の周りを]ぐるぐる回る。
42. けっしてつまらない顔を見せず、心のうちを語る。彼女の苦い言葉を聞くと、口[の中]は甘くなる (=うれしくなる)。

組紐業の女 (paṭaina)

43. 組紐業の女は、絹の布を纏い、額にシンドゥール[の赤い印]をつけている。別離の恋に苦しむ男はその組紐店をけっして離れない。
44. 目くばせをしながら、愛の絹紐を売りつづける。紐についての飾り房は、[男の]心に無数の傷を負わせる。

旅籠の女主人 (bhaṭiyārī)

45. 旅籠の女主人とラクシュミー女神は二人とも同じ姿をしている。訪れた者を丁重にもてなし、去る者には何も尋ねない。
46. 愛の旅人には、旅籠の女主人は心を開く。昼間に見せる[顔]と、夜に見せる[顔]は別のものである。

弓づくり職人の女 (kamāṅganī)

47. 弓づくり職人の女は、眉という弓を持ち上げて己惚れる。恋人が手を掴んで引っ張ると、彼女は弓のように反発する。
48. 心に怒りを保ちつづけていても、彼女の身体は恋人の愛に触れると喜ぶ (裏の意味: 恋人の愛の試金石である)。弓を矯めるように、[恋人を]別離の恋の火であぶる (裏の意味: 恋

¹³ Yājñik: ve bharahaṁ tana gāta. Mīśra/Bhāṭī: dubhara haṁ saba gāta (全身は痩せている)。本翻訳では Yājñik 版を採用した。

¹⁴ 臼で油を搾るために、縛られた役牛が臼の周りを回る様子にたとえている。

人を意のままにする)。

49. 目という矢を笑いながら放ち、[恋人の]心を激しい痛みで焼く。矢の職人の女の矢は、心に突き刺さる。
50. 魂という木材（裏の意味：恋人）¹⁵を突き刺し、見て回す。悲しみという苦難から解き放ち、喜びという膠^{にかわ}をつける。

捺染職人の女 (chāpina)

51. 捺染職人の女は、赤いパーンを[口に]満たして唇を染める。笑いながら愛の戯れに、恋人の顔のうえに印をつける。
52. 性戯に色をそえ、愛神カーマの生き写しのようである。彼女の色艶を見ると、目は華やかな色合いを帯びる。

研磨師の女 (sikalīgalina)

53. 研磨師の女の全身は、恋に時間をかける。目をやっとのことで動かして、顔を鏡のようにする（＝輝かせる）。
54. 目はアイシャドウ、身体は白檀、髪分け目は辰砂で飾られている。身体の色をさらに美しく磨き上げ、まるで身体に愛神カーマがあらわれたかのようなようである。

水売りの女 (sakkina)

55. 水売りの女の若さと美は、なにも恐れない。下顎のくぼみには、いつも労働の汗（裏の意味：恥じらいの水）が溜まっている。
56. 美しい涙をためた彼女の目を見ると、愛のラサ（＝感情、液体）が噴き出す。革袋から水が解き放たれるように、心¹⁶が世間体と威圧から解放される。

香料屋の女 (gāndhinī)

¹⁵ prāna sarīkana. 辞書には木材の意味を確認できなかったが、弓を作る工程を表していることから類推して、Bhātī は「棒」と解釈している。prāna sarīkā 「魂の伴侶＝恋人」が掛詞になっている。

¹⁶ Yājñik:ura, Miśra/Bhātī:ḍara. ḍara の場合は「恐れ」の意味になる。

57. 香料屋の女の身体には美が宿る。見ると、目は[さらに見たくなり]満足することはない。乳房は没食子で、唇は曲げて（裏の意味：唇は香料で）、足から[視線が]離れない。
58. 目は艶めかしく、愛を戯れる。目には4種の練り香水の涙¹⁷をたたえ、髪には香油をつけている。

ラージプート族の女 (rājapūtānī)

59. ラージプート族の女は、美という国を統治し、その燈明である。ベールをかぶって隠れて恋人のそばに来る。
60. 愛の戦場ではいつも、輝く顔を上に向けている（裏の意味：輝く顔を[恋人の]上に置く）。おろした髪は鉄砲で、眉は愛の弓である。

トゥルクの女 (turākina)

61. 賢く、活発で、優しく、清らかである。足に触れると、怒る。愛という愛は[すべて彼女に]支配される。トゥルク（~ムスリム）の女を怒らせてはならない。
62. 頭上のベールを見ると、心は[彼女の]愛の罨にとらわれる。彼女の赤い腰紐は、[恋人の]魂を支配する。

女行者 (jogina)

63. 女行者はヨーガを知らず、愛の喜びに浸る。顔の上には愛の結髪が影を作り、彼女は彷徨う。
64. 顔には遁世者の前髪[を垂らし]、乳房は角で、言葉は毒である。瞑想で目を閉じ、唇という会陰の印¹⁸を結ぶ。

吟遊詩人の女 (bhāṭina)

65. 女詩人は愛を彷徨う。止められても、家にはいない。若さに固執し歩き回り、愛を分断してつなぎ合わせる。
66. 真珠の首飾りを二重に胸にかけ、顔の魅力は四倍増しになる。彼女自身の若さの美を、賞賛しない者がいようか。

¹⁷ 白檀、サフラン、沈香、麝香を混ぜたもの。

¹⁸ mudarā dhāre adhara ke. adhara は一般に唇の意味であるが、ヨーガの会陰の印との掛詞として用いられている。

女奏楽師 (ḍomanī)

67. 女奏楽師は、魅惑的な姿で紳士の心を盗む。少し歌っては、しゃれて粋な旋律を奏でる。
68. けっして顔を真っ直ぐに向けない。うつむいて笑い、振り向いて微笑む。喜ばせて愛人のすべてを奪うと、聞かれている(=噂されている)。

女召使 (cerī)

69. 女召使は性愛に夢中で、目の合図で気持ちを伝える。とても怪しげなあくびをして、腕を上げて伸びをする。
70. 若さに酔い痴れて歩き回り、気持ちは家はない。自身の愛や性戯をすべての人に話してまわる。

女軽業師 (naṭinī)

71. 女軽業師は竹の上に乗る、[恋人の]心を竹に縛りつける。[彼女の]性愛の目くばせと、流し目に[恋人は]息をのむ。
72. 類まれで派手な芸は、[恋人の]意識を驚掴みにする。ところどころで身体を折り曲げて、こっそりと心を盗み取る。
73. [彼女の]言葉によって恋人の清らかな心は奪われ、その視線によって気持ちは引き込まれる。昼も夜も、ヒンドゥーもムスリムも、出し物を見て魅了される。
74. ぶら下がって円を描き、独自の方法で歌う。赤や白の輝きは、[ホーリー祭で撒く]色粉でできた首飾りのように見える。

遊女 (kañcanī)

75. 遊女は、黄金のような身体に、黒い胴着を着ける。黒雲をまとった太陽が、早朝輝くように。
76. 目の奥で踊ってみせ、不機嫌に合図を送る。曲芸師のようにして見せて、[その]美しさで心を奪う。
77. 太鼓でハリ（ヴィシュヌ神）とクリシュナ神の美德を称え、激しく愛の音を叩きだす。最初にヴィバーサ¹⁹を歌い、[愛の]戦いに勝利する。
78. 愛の狩人は着飾り、[獲物は]ラサの矢で狙われる（愛の音楽

¹⁹ 早朝に歌われるラーガ。

で縛りつけられる) ²⁰。心という獲物が喜ぶまで ²¹、目の矢を放つ。

79. 最初に心を要求し、全身を捕まえる。抱きしめて胸をつけ、向きを変え、[心を]与えない。
80. 燈明はその身を燃やし[て光りつづけ]、多くの蛾は[燈明で]焼かれつづける。ひな鳥は破った殻に戻らず、奪われた心は身体に戻ることはない。

芸妓 (pāturī)

81. 芸妓は芸の蔵であり、魂の入った人形のようなものである。艶な手足は[恋人の]心を奪う。肉体は5つのラサを持つ ²²。
82. 彼女の[恋の]方法は、味わいの中に無味 ²³を、無味の中に味わいを生み出す。逆の愛の遊戯をする者には、より一層恋慕をあおる。
83. 彼女は来ると言いながら別のところに行き、[恋人の]身体は別離の痛みで熱を帯びる。異なる序奏に、異なる[ラーガの調べ]を歌って聞かせる。

²⁰ Bhāṭī は、「[遊女は]愛の狩人を飾りつけ、愛の音楽で捕らえる」と解釈している。なお、本翻訳では、愛の狩人は遊女とし、bāndha paryo rasa tāna の tāna を動詞の tānanā 「[矢を]つがえる」の意味で解釈して訳した。裏の意味は「愛(ラサ)の音楽で縛りつけられる」になる。

²¹ mana mṛga jyom rījhai nahīm. 一般的には「心という鹿が喜ばないように」という訳になるが、否定辞が文脈に合わないため、現代ヒンディー語の否定辞と subjunctive を用いた用法に倣い、「心という鹿が喜ばないかぎり>心という鹿が喜ぶまで」という意味で解釈した。

²² 本編でラサとは、一般に9つあるとされるラサ(情趣)の意味ではなく、愛に関連して用いられているが、ここでいう5つのラサが具体的に指すものは明らかではない。なお、愛神カーマが用いる5本の花の矢と関係があるのかもしれない。

²³ birasa は「無味」という意味だが、舞踊の種類とする説もあり(Rosenstein 1997: 269 n.7)、その場合は掛詞になっている。裏の意味は、「恋の中でビラサのダンスを踊り、ビラサのダンスの中で恋が生まれる」となる。

ヒル使いの女 (juṅkihārī)

84. ヒル使いの女は、若さを手にして歩き回り、喜びを与える。自分の肉を味わわせて、ほかの者の血を吸いとる。
85. 黒い前髪先端が、別離の恋に苦しむ男の胸に刺さる。別離の恋の痛みに、血に飢えたヒルをつける。

作男の女 (khaṭakina) ²⁴

86. 作男の女は別離の辛さを語る。夜には一瞬たりとも眠れない。愛神カーマの兵が走りより、大いに怒る(=彼女を苦しめる)。
87. 誰かが別離の辛さを語っても、それを何も理解しない。彼女の若さと美しさは、語りつくせない話である。

洗張屋の女 (kundina)

88. 汚れた布の洗張屋の女は、様々な人の心にめり込む。昼も夜も彼女の網に、心という魚は掛かる。
89. 彼女の身体を抱きたいと愛を期待する者は、服についた匂いが芳香に感じられる(裏の意味: 服の香りがしみつく)。

石鹼屋の女 (sabanīgarina)

90. 石鹼屋の女の全身と心には、汚れはまったく見えない。発情という石鹼をこすりつけ、服を白くしたかのようなようである。
91. 心の中の別離の辛さを、すっかり綺麗になるまで取り去る。心の汚れを洗う者に、石鹼をこすりつける。

左官の女 (thopina)

92. 心の出隅 ²⁵のように、左官の女の乳房は少し盛り上がる。彼女は美の町で愛神カーマの土台を築く。
93. 幸せの屋敷である顔に、ベールから覗く姿は影を作る。曲がっ

²⁴ khaṭakina を Bhāṭī は khaṭīka (果物や野菜、ときには大麻や椰子酒を栽培し販売するジャーティ) の女としている。別れの辛さを語っていることから、恋人は離れて仕事をしているものと推測して作男と訳したが、詳細は不明。

²⁵ sīmva<sīmā. 境界のことを指すために使われており、左官の専門用語の「出隅: 2つの面がぶつかる外壁の角」を用いた。

た眉の間にある目を閉じて、足を置く。

砧打ち職人の女 (kundīgarina)

94. 金のような砧打ち職人の女²⁶は、とても固く美しい。愛しい人の叫び声のなかで、ほかの誰の言葉も聞こえない。
95. 彼女は砧のように[固く]、多くの愛の衝撃を受けても、没頭しつづける。身体はカーマ神の愛の色に染まり、ひたすら[愛を]作りつづける。

綿打ち屋の女 (dhuniyāina)

96. 綿打ち屋の女は、昼も夜も性戯のように綿を打つ。彼(恋人)の旋律を知らずに、どうして弦を鳴らすのか。
97. 性愛が強くなると、触れると柔らかくなる。恋人の身体に、糸のように全身でからみつく。

機織りの女 (korina)

98. 無慈悲な機織りの女は、愛の規則と思いを知らない。別離の恋に苦しむ男は、彼女の家で縦糸を張り、織る。
99. 別離の恋の荷は届かず、縦糸は愛を通さない。彼女は若さという水を口に含み[吹きかけ]、恋人の目²⁷[という横糸]を引っ張る。

革袋職人の女 (dabagarina)

100. 若さにあふれた美しい革袋職人の女は、恋人のそばで語る。あなたの匂いのほかに、私にとって心地よいものは何もない、と。
101. 豊かな乳房という革袋は膨れあがり、胴着におさまらない。

²⁶ kundana sī kundīgarina. kundana (金) - kundīgarina (砧打ち職人の女) で頭韻しているため、Bhātī は kundīgarina を砧打ち職人の女ではなく、金箔屋の意味で解釈している(2007:211)。本稿では、一般的な砧打ち職人の女とした。

²⁷ nema < niyama は「規則」の意味だが、Yājñik 版と Miśra 版では naina になっている。行末で pema - nema と脚韻を踏ませるために、naina > nema に音韻変化したと解釈し、naina (目) で訳した。

目という革袋から、新しい恋という油があふれ滴り落ちる。

太鼓作りの女 (nagaracina)

102. 太鼓作りの女は、顔と身体を美で飾りたて、町を包む。家々で彼女の美を称える太鼓が鳴りつづける (=噂される)。
103. 足の指輪をはめて立ち、恋人とともに伸びをする。まるで愛神カーマの太鼓を真夜中に打つかのようである。

仲買業の女 (dalālinī)

104. 仲買業の女は、身体の美しさで喜ばせ、色目を使い、顔を輝かせ、客に自分の容姿を見せて、心をねじりつぶす。
105. 世間体や、一族の名誉から、言葉は語らず、目くばせで別離の恋に苦しむ男と値の駆け引きをする。

真鍮細工師の女 (ṭhaṭherinī)

106. 昼も夜も真鍮細工師の女は身体を整えて飾る。彼女の美しさにとっては、真珠も皿上のものに過ぎない。
107. 装身具や衣装をまとい、彼女は恋人の顔を見る。尻と乳房は、真鍮を流し込んで固めたかのようである。

紙屋の女 (kāgadina)

108. 紙屋の女は紙のような身体をし、愛で満たされている。愛に喜び、愛の水に濡れて、紙のようにしんなりする。
109. 紙の凧のように、彼女は愛の空を舞い上がる。遠くから思い、[恋人の]気持ち[の糸]を引っ張り、心のそばに寄り添う。

インキ屋の女 (masikarina)

110. 会う口実に、インキ屋の女は一瞬のためにインキを満たして渡す。黒か白か分からなくなるような魔法をその目でかける。
111. 顔には美の輝きをたたえ、一瞬たりとも汚れることはない。髪は ^{カーギャル} 煤 をつけたよう[に黒く]、顔は燈明の光のようである (=白い)。

鷹匠の女 (bājadārinī)

112. 鷹匠の女は、鷹が恋人で、[自らの]身を飾らない。鷹が[いつも]下を見るように、別離の恋の痛みを身につけている。
113. 目という狩人を飾り立て、心という鳥を捕まえる。別離の恋に苦しむ男の心という鷹に、唇さえも味わせない。

地方行政官の女 (jiledārini)

114. 地方行政官の女は雲のようにとても冷たくても²⁸、別離の火を強く燃え上がらせる。とても偉そうにしていながら、寝所では鼻先であしらわない。
115. ベールをかぶって歩く彼女は、他人の心には深遠な家[のよう]である。彼女の美しい恋は、地方行政官に影を落とす。

大麻売りの女 (bhaṅgerini)

116. 大麻売りの女の身体の輝きは、[ホーリー祭の]色粉でできた美しい首飾りのようである。葉っぱを挽いて水を含ませ、味を見て、目を赤く染める。
117. 唇を赤く染め、ある者には愛の盃を渡す。[また]ある者の動きと知性と記憶をひらりと奪う。

魔術師の女 (bājigarina)

118. 魔術師の女は市場^{バーザール}で愛の魔術に興じる。それを見ると、舌は味わうことをやめ、目は貞節の掟を破る (=彼女に夢中になる)。
119. 彼女の愛のラサを飲んだ男は、彼女に支配される。ある者は立ったまま彷徨いつづけ、ある者は落ちて意識を失う。

チーター使いの女 (cītābāni)

120. チーター使いの女を見ると、別離の恋に苦しむ男は心を奪われる。車につながれたチーターのように、自分の足では動けない。
121. 自らの年齢に自惚れて、誰も友とは認めない。腰を見せると、チーターの心までをも奪ってしまう。

²⁸ 雲は、涼しさ、ひいては心地よさをもたらすものとして用いられていると考えられる。

木こりの女 (kaṭhīhārī)

122. 心が固い木こりの女は、木製人形である。一瞬たりとも恋人のそばを離れず、別離の恋の罨にかけない。
123. 誰かが[何を]言っても何もせず、心は寄り添いつづける。別離の恋に苦しむ男の繊細な心が、どうして木のように[固く]ならないものか。

草売りの女 (ghāsina)

124. 草売りの女は、日持ちしない。若さを捨てて座っている。火が草を焼くように、すぐに萎びてしまう。
125. 自分の身体と恋人の愛をまったく考慮しない。年齢という高速船は、わずかな日々しかくれないのに。

タンバリン奏者の女 (ḍaphālīnī)

126. タンバリン奏者の女は自分の恋人との愛に没頭する。逢瀬のラサも分からず、別離のラサも分からないほどに。
127. すべての者は関係ない話をし、悪意も愛もない。彼女の家では昼も夜も、別離のタンバリンが鳴りつづける。

御者の女 (garībārīna)

128. 御者の女の愛は、別離の恋に苦しむ男の胸に突き刺さる。シヴァ神の乗物 (= 牡牛) の世話をし、愛を成就させる。
129. 彼女との恋の辛さは、棘が刺さった時でも感じることはないほどである。彼女は車に座らずに、目で[恋人の心を]操る。

象使いの女 (mahāvātīna)

130. 巧みな象使いの女は、自分の身体[のバランス]を保ちながら[象に]乗る。若さに喜びし酔い痴れて、恋人とともに歩き回る。
131. 身体に黄色の布と胴着をつけ、若い女は手綱を握る。自分の恋人の激情にあわせ、そこらじゅうを[突き棒で]叩いて向きを変える。

キャラバンの女 (saravānī) ²⁹

132. キャラバンの女は反対のラサ（女性が優位の恋愛？）をすることを望み、恐れぬ。別離の恋に苦しむ男は、[気持ちを]隠しても隠し切れぬ。ラクダが山羊の中に隠れられないように。
133. 愛の短剣を[その身に]括りつけ、誰彼構わず彼女は心を奪う。その気になると、がっちりとして[ラクダの]鼻綱を掴むように、[恋人]を掴んで引っ張る。

蹄鉄打ちの女 (nālabandinī)

134. 蹄鉄打ちの女は、昼も夜も女友達といっしょにいる。若さという馬の蹄に[彼女は]蹄鉄を打ち込ませない ³⁰。

馬丁の女 (ciravādārīna)

135. 馬丁の女は、上衣チョーリーの中で[恋人の]心を奪う。彼女の身体の上を、愛という馬櫛で毎日梳く。
136. 身体は愛に支配され、一晩中恋人と過ごす。別離の恋に苦しむ男に、ほっそりした腰を抱擁の中で見せる ³¹。

洗濯屋の女 (dhobina)

137. 洗濯屋の女は、恋に夢中で、家にもガートにも居つかない。頭に衣類を乗せ、家々や宮殿で配りながら歩き回る。
138. 艶やかな身体に顔を傾げて、唇を[きゅっと]曲げる。彼女の方を見なければ、愚かな心は奪われない。

皮革業の女 (camārīnī)

139. 皮革業の女は、美と愛をつかって心を盗む。[わずか]2日の若さの天下で、革製の通貨を通用させる（＝横暴なことをす

²⁹ saravānī を Bhāṭī はラクダ使いの女としている。saravān はテントの意味であるため、キャラバンの女と訳した。

³⁰ 青春を謳歌しないで、若さが早くに失われるという意味か？

³¹ mūṭī māhiṃ dikhāvahī 「握りこぶしの中で見せる」だが、「握りこぶしの中で」には「意のままに操る」の意味が類推できるものの意味が通らないため、「抱擁の中で見せる」と訳した。

る)。

140. 愛の皮革を広げて、彼女と寝れば、その者のすべての統制は必ず失われ、一族の名誉は傷つく。

チューリー³²売りの女 (cūharī)

141. 幸せにあふれ、すばらしいチューリー売りの女を見ると、心にシミがつく。彼女の唇と頬の色が[そこに]滴り落ちたように。
142. 彼女は、最高の蔓草のように揺れ、愛の交わりを持つ。手を掴み、首を抱いて、別離の恋の病を治す。

使用テキスト

Bhātī, Deśrāj Siṃh, 1992. *Rahīm Granthāvalī*, Delhi: Aśok Prakāśan.
Miśr, Vidyānivās, 1985. *Rahīm granthāvalī*, New Delhi: Vāṇī Prakāśan.

Yājñik, Māyāśaṅkar, 1927. ed., *Rahīm-ratnāvalī*, Kāśī: Sāitya-Sevā-Sadan.

参考文献

- Busch, Allison. 2014. “Poetry in Motion: Litarary Circulation in Mughal India” In Thomas de Brujin and Allison Busch, ed. *Culture and Circulation: Literature in Motion in Early Modern India*. Leiden: Brill, pp. 186-221.
- Callewaert, Winand M. 2009. With the assistance of Swapna Sharma, *Dictionary of Bhakti: North Indian Bhakti Texts into Kahri, Boli, Hindi, and English*, 3 Vols, New Delhi: D.K. Printworld.
- ‘Lalit’, Anantaśaraṇ Ojhā. 1927. ed., *Rahimana-Lālitya*, Kalkatta: Varmman Press.
- Miśr, Pratāp Kumār, 2007. *Khānakhānā Abdurrahīm aur saṃskṛt, Vārāṇasī*: Akhil Bhāratīya Muslim-Saṃskṛt saṃrakṣaṇ evaṃ

³² 手首につけるバングル。

- prācy śodh saṁsthān.
'Nīlakamal', Bamabam Siṁh. 1979. *Rahīm-sāhitya kī bhūmikā*,
Patna: Bihār-Rāṣṭrabhāṣā-Pariṣad.
Rosenstein, Lucy. 1997. *The Devotional Poetry of Svāmī Haridās*,
Groningen: Egbert Forsten.
Yājñik, Māyāśaṅkar. 1925. 'Rahīm', *Mādhurī*, varṣ-3, khaṇḍ-2,
saṁkhyā-2, pp. 254-257.

長崎広子 2014. 「アブドゥル・ラヒーム・カーンカーナー著『バルヴァイ詩集』—ムガル廷臣のクリシュナ讃歌—」, 『インド民俗研究』, 第 13 号, pp. 43-63.

* 本研究は JSPS 科研費 15K02455 の助成を受けたものである。